
冬の終わりに

櫻澤さくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬の終わりに

【Nコード】

N3008S

【作者名】

櫻澤さくら

【あらすじ】

ケース・レッドドラゴンの後、失踪したアリッサ。そして、傷心のジョージ・リートの元に綾瀬臣が訪ねた。彼女が告げる言葉とは……？

一応、Smile japan賛同作品です。これ違っただろって意見ありましたらそのときにはタグをひっぱがします……。
（ ）
【名前のない子供】シリーズはこちら。
↓ <http://nocode.syosetu.com/s0611a/>

彼女がほえんだ。

優しい女性だ。

完全な人間などいないと、世間では一般的に言われているが、彼女に出会った人間は誰しもその認識を改めざるをえない。

それはそう。

あくまでも「一般的」な場合の話だ。

絶世の美貌と、優れた身体能力。そして高い知能指数と明晰な頭脳。

天は二物を与えず、と言うが、彼女は生まれ落ちたときに与えられた物は一つや二つではすまない。

彼女自身の資質に加えて、家柄は古くから続く旧家で、近代に入ってからは大財閥として名を馳せる。

黒髪に、黒い瞳の象牙色の肌の若い女。

絶世の美貌の優しい女、というだけでも話題性は充分だというのに、彼女は人が羨むものの全てを兼ね備えている。

しかし、だというのに。

彼女は決して表の社会には立たない。

ひっそりと、暗い闇夜を照らす月か、もしくは全てを目映く照らす太陽のように。

彼女は孤独だ。

「……あの人の強さは、あなたが一番ご存じでいらつしやるはずですわ」

綾瀬臣は唐突にFBI犯罪捜査部を訪れた。

本来、一般人である彼女のような人間は、犯罪捜査部のオフィスに入ることはできない。

しかし、臣は「犯罪捜査部のジョージ・リートさんにお会いしたいのです」とそれだけ言つて、オフィスに案内された。

アポイトメントもなにもあつたものではない。
まさに圧倒的。

その存在は世界を揺るがし、全てを超越する。
護衛の少女を連れただけの彼女の姿に、誰もが目を釘付けにされた。

かつて彼らが追いかけていたマジックボム。
アリッサ・ノースウッドなどとはまた異なる、圧倒的な存在感。
袴姿の少女と、春らしい小紋を身につけた綾瀬臣。
二人の日本人女性。

日頃、愛着と侮蔑の両方を込めて「イエローモンキー」だとか「ジャップ」などと呼んでいる白人たちがそろいもそろって目を見開いた。

言い方を変えるならば、神の声を聞いたのだ。
脳裏へとはつきりと、強く訴えた。

「目を背けるな」

誰もが彼女から目をそらせなかった。
黄色い猿とバカにできる程度の存在感ではない。

人種差を越えた美貌の持ち主に、彼らは息をのむ。
音をたてず、肩も頭も揺らさない。

彼女たちは静かに、滑るように歩く。
一瞬、シンとその場が静まり返り、その後にさざ波のようなざわめきが広がっていく。

誰も、目をそらせない。

誰も、無視できない。

白人至上主義的な傾向にある者ですら、彼女を無視したり侮蔑したりすることができない。

全身から放たれる重い気品に、その場にいる全員が絶句する。

「ジョージ・リートはいませんか……？」

不意に少女の声が響いた。

静まり返ったオフィス内に、まるで打ち水をするかのように響く。

アメリカ基準で言えば、少女はまだ小学生のようにも見える。しかし、彼女は明らかに日本人だ。

そうになると、見かけ以上の年齢であることは想像がつく。主人であるプリンセスに付き従う従者のようにも見える。おそらくそのままなのだろう。

しかし、二人ともが、その場にいる捜査官たちが束になってかかればならないほど強い。もしくは、束になってかかってもかなわないかもしれない。

「ジョージ・リートはいないのかと聞いているのです」

静かだが、はっきりとした声に、若い黒人の捜査官が立ち上がった。

「リート捜査官はでているが、どんな用件だ？」

傍目にも動揺した声に、袴姿の少女は上半身を乗り出しかける。

それを美貌の女が片手で制した。

「そうですか、でしたら待たせていただいてよろしいですか？」

につこりとほほえんで美貌の女が告げた。

袴姿の少女は、どこか不満げな瞳で女主人を見てから、不躰な視線を送る捜査官たちを見やった。

知っている者がいれば、まるで日本の時代劇にでてくる主従関係のようだとも思っただろう。もっとも、その場に日本の時代劇など知っているような人間がいるわけもない。

美貌と、存在感に圧倒されて言葉がでてこない。

好みこそ分かれるだろうが、彼女は誰も文句のつけようのない美女だ。

平均的なアメリカ人女性よりも上背は高く、手足が長い。小さな顔と、八頭身のスタイル。整った顔立ちの中にある薄い唇と、高すぎない鼻とやや切れ長だが二重の目。長いまつげに彩られた黒い瞳は深い闇をたたえていて、どこかオリエントな印象を他者に与える。

彼女が純粹な東アジアの人間だと、誰が信じるだろう。

混血の進んだアメリカ人などから見れば東アジアの純系ではなく、東アジアをルーツに持つ混血だと思いかもしれない。

綾瀬臣とはそんな女性だ。

彼女は控えめに椅子をすすめられて、そこに腰掛けると時間を計ったように袴の少女から本を手渡されて、視線を落とした。

そんな少女と女の、どこか映画を思わせる主従関係に、遠巻きに眺めている。

まるで彼女の機嫌を伺うように。

美しすぎて見ていられないのだ。彼女の存在が恐ろしくて目を合わせるができない。

彼女という人間はあまりにも異質だった。

そうして、一時間ほどたったころだろうか。

オフィス内に男が戻ってきた。

大柄な狙撃手だ。

長身の美貌の女よりもさらに頭ひとつ分ほど大きい。

男も女もどれだけ背が高いかわかろうと言うものだ。

身長が二メートルある男は灰色の髪を揺らしてから首を傾げた。

とつさに彼女の名前を呼ぼうとした彼を見つめた女は、そつと自分の唇に人差し指をあてた。

清冽な美しさの下にある冷ややかな凶暴さを、凶悪な犯罪者を追いかける人間たちは感じ取っていた。

そこにいる、彼女はなんなのだろうか、と。

あなたをお待ちしておりました。

移動したのは貸し切りにされた、日本食のレストランだ。当然のように、袴姿の少女は目を伏せて端座している。

男は自分も畳に正座をするべきかと一瞬、悩んだようだったが、結局目の前の女に向かい合うような形で座った。

「アメリカのかたに、畳では座りづらいですか……？」
静かに彼女が問いかける。

「いや、大丈夫だ」

大男はそう言って苦笑した。

どこか影のある笑顔に、綾瀬臣は眉をひそめる。

「リートさん」

臣が彼を呼んだ。

女の声に、男が目線を上げた。

控えめな表現をする女。

その女の本当の姿を、彼は知らないわけではない。しかし、表面上、彼女は犯罪者ではなく警察組織から追われる人間ではない。

綾瀬臣は、強大な権力の下に守られている。

誰もが彼女になりたくて、しかし、誰も彼女にはなれない。

「あなたは、ツヴァイと一番に懇意にされていらっしやいました」
静かな、優しい声が流れていく。

空間を彼女の声が支配する。

わたしは世界で二番目に強いからツヴァイなの！

彼女の声を思い出して、綾瀬臣はほえんだ。

「……本当に、大丈夫ですか？」

重ねて彼女が問いかける。

男は沈黙したままで視線をさまよわせた。

心配そうな彼女の声に、男は心ここにあらず、と言った様子のみでうなずく。

「ツヴァイが連れ去られたと聞きました」

どのようにして、日本にいるはずの綾瀬臣のもとにまでその話が伝わったのかはわからない。

しかし、今の彼はそんなことを追求できるような精神状態ではなかった。

要するに、彼女の情報網はとんでもないということだけが彼にひしひしと伝わってくる。

おそらく、彼女にとってインターネットなどの情報網よりももっと確実なものを持っているのだろう。

彼女はそういった人間だ。

犯罪捜査を行う人間たちの思惑も、常識も全てを容易に飛び越えていく。

「君は、強いな……」

ようやくの思いでつぶやいた彼に、年若い女は小首を傾げながらほほえむ。

日本人の笑顔は謎が多いと言うが、彼女のそれもそうなのだろうか。

悲しくても、彼女はそれを顔に出さない。

いや、悲しくないのかもしれない。

疑心暗鬼に駆られながら、ジョージはそんなことを考える。

彼女は、なにを考えているのか。

かすかな衣擦れの音をたてて、臣は立ち上がった。

「リートさん」

柔らかな声が彼を呼ぶ。

「夜の闇がとても深くて、先が見えないけれど、夜は必ず明けるものです」

正座した足の上に拳を握る男の手をとって、臣がほほえんだ。

暗闇を映したような瞳の奥にたゆたう悲しみ。

彼女は、悲しさを押し隠してほほえんでいるのだ。

そのことに気がついた。

「君は、悲しくても泣かないのか……？」

訪ねられて、彼女は困ったようにかぶりを振った。

「わたしまで泣いてしまったら、誰が世界の悲しみを受け止めるのですか？」

世界が泣いている。

ツヴァイと呼ばれた彼女を失ったことで、世界が泣いている。

綾瀬臣は、自分を決して過大評価したりすることはしない。だが、彼女は自分の役目を知っていた。

「……リートさん、大丈夫ですよ」

彼女は何度も繰り返した。

手に触れた冷たい彼女の手に、男は瞳を潤ませる。

男は泣くものではない、などと言われるが、大切な人間を失ったときに、冷静でいられる人間がどれだけいるだろうか。

目の前にいる臣は幾度となくそんな事態に相對してきた。そうして、彼女は泣かずにいられるように、権力を振りかざすことを選択した。

誰も泣かせないために、戦うことを決めた。

「イギリスの詩人が言ったそうです」

彼女はジョージ・リートの目をまっすぐに見つめて唇を開いた。

「冬来たりなば春遠からじ……」

彼女の言葉に、ジョージは顔を上げた。

驚いたように。

優しく、控えめに咲く花のようにほえんでいる目の前の女。

彼女は、全ての人間の悲しみを受け入れるために生まれたのではないかと、そんなことを思った。

「きつと、暖かい春がやってきますから……」

どうか、彼女を信じてあげてほしい。

黒髪の日本人の女はそうして腕を広げた。

彼を抱きしめる。

傷ついた人間を癒すために、彼女は生まれた。

底なしの慈しみを誰かに向けるために。

まるで、東の果てに生まれた聖者だ。

その柔らかな香りの中で、ジョージは号泣した。

「……大丈夫。今は泣いていいんです」

中年の大男が号泣することなど、傍目にはおかしなものに映ったかもしれない。

しかし、そんな心配は今はいなくてもいい。

彼女はそれを知っていて、個室を選んだのかもしれない。

彼とは比べものにならない、細くしなやかな腕で男の広い背中を

さする彼女は、体がへし折れるのではないかとも思えるほど強い力で抱きしめ返してくる男の、頭に触れた。

「ちゃんと、泣いたほうがいいんです……」

彼女はそうして悲しく笑った。

もうすぐ、春が訪れる。

「泣いて、笑って、そうすれば春がきつと訪れますわ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3008s/>

冬の終わりに

2011年4月9日19時55分発行